

今年もクリスマスがやってくる。ケーキにごちそう、プレゼント……。イルミネーションが輝く街に胸は高鳴る。しかし、私がイタリアに留学して初めて経験したクリスマスは、今も忘れられない思い出として心に焼き付いている。

当時の私は、イタリアのクリスマスこそ、さぞや華やかだろうと思い込んでいた。が、その当日は、それまで活気にあふれていた街が突然、火が消えたような静寂に包まれる。それぞれの家族は夕食を済ませ、深夜教会に行き、神に厳かな祈りと歌を捧げる。

教会で寒さに震えながらも無心に祈りを捧げるその姿に、異邦人の私は信仰の尊さと西洋文化の奥深さに強く胸打たれ、まさに神秘的な時間を体験したのだった……。

1914年12月25日、第一次世界大戦が始まって初めてのクリスマスでの出来事。バルダ

「クリスマス休戦」に思いをはせて



ー・キルヒホフというドイツの名テノール歌手が、西部戦線のドイツの塹壕へ慰問に訪れ、戦場で「きよしこの夜」を歌った。その美しい歌声にドイツ軍はクリスマスツリーにキャンドルを灯した。

対峙していたフランス、イギリス軍の両兵士たちも自発的に戦いをやめ、両軍ともに歓声と握手を交わし、伝説の「クリスマス休戦」という奇跡が生まれる。兵士たちは互いにこの歌を歌い、配給品を贈り合ったり、たばこを味わったり、酒を酌み交わしたり、しばしサッカーに興じたそう。

お互いを殺し合わねばなら

ぬ敵国の兵士たちが戦争の最前線で笑顔と友情を結んだ奇跡のクリスマス。小さな歌が敵も味方もなく人間の心を繋ぐ……。しかし、戦闘は後日再開され、以降、軍上層部の厳命により、「クリスマス休戦」は実現されることはなく、第一次世界大戦の戦禍は一層、激しくなっていた。

今も戦いの中にクリスマスを迎えねばならない子供たちがいる。人はなぜ戦わねばならないのか。今一度考えよう。平和にクリスマスを迎えられる今だからこそ……。

(さとう・しのぶ 一声楽家)

—毎月第3金曜日掲載

